産経新聞　朝刊　和歌山版　2024年7月7日

くじら日記

太地町立博物館から

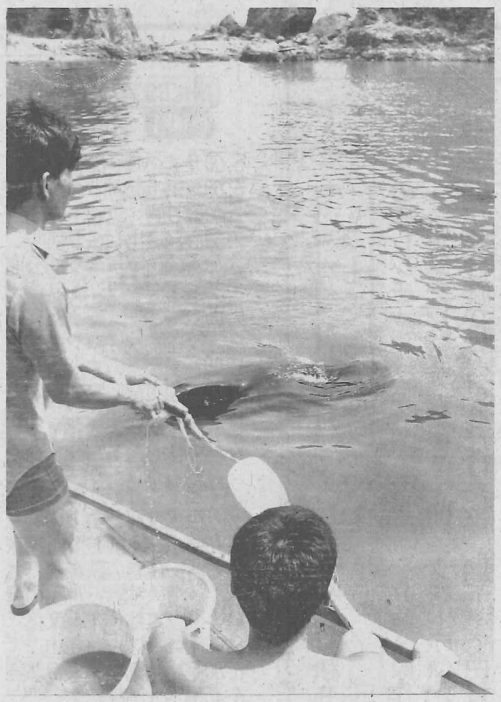
鯨類飼育の変遷③

餌を食べないクジラたち

1969（昭和44）年にオープンした太地町立くじらの博物館の鯨類飼育はクジラを捕らえることから始まりました。追い込み漁によってコビレゴンドウの生け捕りに成功し、待望のクジラが泳ぐ鯨プールが誕生したのはオープンから3カ月以上がたったこの年の7月23日のことでした。4日後には、再びコビレゴンドウが町内の太地港に追い込まれ、鯨プールのコビレゴンドウは40頭ほどに達しました。

しかし、その後、コビレゴンドウは1頭、また1頭と息を引き取るのでした。主な原因は餌を食べないことによる餓死でした。日誌には「投餌するがふりむかず、おどろくだけで食べようとせず」と記されています。当時飼育に関わっていた前館長で顧問の林克紀氏は「夜行性なのでと思い、夜に餌を投げてみたり、はえ縄のように岸と岸の間にテグス（糸）を張ってイカをつるしてみたりしたが食べなかった」と振り返ります。餌付けに苦慮していたところ、当時の顧問であった故西脇昌治氏から、強制給餌の指示があったといいます。

西脇氏は当時、東京大学海洋研究所教授であり、鯨類学を体系化した書籍「鯨類・鰭脚類」を著した日本を代表する鯨類学者でした。さらに西脇氏は、米国各地の海洋テーマパークを調査し、神奈川県藤沢市の江ノ島水族館（現新江ノ島水族館）が1957（昭和32）年にオープンした日本初の鯨類飼育展示施設、江ノ島マリンランドのイルカプールの設計に関わったとされます。当時の太地町長であり、町内の海洋レジャーセンター建設に奔走していた庄司五郎氏は西脇氏を信頼し、くじらの博物館創設の協力を要請していたのです。



オープン間もない時期に行われた鯨プールでのコビレゴンドウ餌付け。解凍したイカを食べさせている―太地町

西脇氏は、雑誌「月刊百科」への寄稿で、庄司氏を「大胆不敵でユニークな男」とし、「鯨の研究を生涯の仕事としている者にとって、自分の構想による鯨のための博物館の展示を考えてくれという話は、ことわるわけにいくものではなかった」と、協力に応じた経緯を記しています。

西脇氏が指示した強制給餌とは、解凍した魚などの餌をクジラの食道に人為的に通して食べさせることです。日誌には、連日のように「強制給餌」が記されており、数日後に「餌付成功」と力強く書き込まれました。

しかし、こうした努力にもかかわらず、1年がたつ頃、鯨プールのコビレゴンドウは姿を消してしまいました。広い鯨プールに放たれた全てのクジラに強制給餌を試すことができなかったことに加え、肺炎などの感染症にかかるクジラが後を絶たなかったためです。治療も十分に行き届かなかったのでしょう。この鯨プールの「放し飼い」が多くの課題を残し、鯨類飼育の教訓になりました。

（太地町立くじらの博物館館長　稲森大樹）

◇

原則、第1日曜日に掲載します。